留学生教育におけるバイリンガリズム授業の意義

呉　　禧　受

要　旨

本稿では2021年度春学期に実施した、名古屋大学国際言語センター日本語・日本文化コースの「言語文化の多様性入門（バイリンガリズム）」について報告する。授業は、「世界の言語文化の多様性とバイリンガルについての基本的な知識を得る」、「日本におけるバイリンガル事情を理解する」また、「学習者自身の言語背景と使用の多様性について理解を深める」ことを目標に行われた。一つの授業テーマに対し授業前活動、授業、授業後活動の３つの活動を通して授業内容の定着を高めた。

授業の最後に実施した学習者アンケートでは全体的に非常に高い評価が得られた。学習者のコメントから、「意見交換」、「授業のテーマと内容」、「論文などの資料」に対しての満足度が特に高かったことがわかった。留学生を対象にするバイリンガリズム授業の意義として、留学生自身が関わっている複数の言語と文化を肯定的に理解し、さらには日本社会が目指す多言語多文化共生を共有できるのではないかと考える。

キーワード

バイリンガリズム、多言語多文化、言語文化の多様性入門、授業前活動、授業後活動

１．はじめに

本稿では、名古屋大学国際言語センターにおいて2021年度の春学期に実施した留学生向けのバイリンガリズム授業について報告し、その意義について述べる。名古屋大学国際言語センターでは、留学生を対象としたバイリンガルズム授業は2021年度の春学期に初めて行われた。対象の留学生は日本語・日本文化コース（以下、AJ コース）の学生であり、週１コマ90分の授業を15回行った。授業は「言語文化の多様性入門」という授業名で

行われ、様々なバイリンガルについての考え方を理解し、さらに世界で起こっている言語現象と文化の多様性を理解することを目的とした。

授業で扱ったバイリンガルはGrosjean（2012）に倣い、「自分のバックグラウンドに関わる言語と、現在生活している社会の言語を日常的に使う人」であると定義する。本授業では、一定の繋がりを持たない言語を学習を通して習得したバイリンガルは本授業の対象として含めなかった。例えば日本人家庭に生まれ、子どもの頃から英語塾やインターナショナルスクールに通ってバイリンガルになったようなケースは対象としていない。本授業におけるバイリンガルは「必然的に起きる社会の言語現象」という捉え方であるからである。

日本に居住する外国人の増加に伴い[1]、日本語教育が担う責任と可能性は拡大しつつある。その一つは、日本語教育の対象をこれまでの留学生・就学生を対象とする「学校型」の教育だけでなく，地域社会で生活する生活者としての外国人を対象とする「地域型」のものにまで拡大しなければならないことであり（庵2009)、さらには日本社会において、様々なバックグラウンドをもつ外国人やその家族と子どもたちが日本社会の一員として受け入れられるように手助けすることである。そのためには、多言語多文化に対して受け入れ側の日本社会の理解だけではなく、日本という異言語異文化環境に置かれている留学生自身も自分の言語文化的背景を維持しながら多言語多文化について理解する必要があると考える。特に、今回の授業に参加した留学生は日本語を専門とし、これから日本語で研究を行っていく可能性が高い学生たちであり、多言語多文化への理解は今後の学生の研究に直接的、または間接的に役に立つことが期待できる。

バイリンガリズムへの理解は多言語多文化を背景とする人たちへの理解へと繋がる。（福島2017）バイリンガルは身近なところで実際に起こっている社会現象であり、社会の構成員は何らかの形でバイリンガルという考え方と関わっていると考える。「言語文化の多様性入門」授業では、自らもバイリンガルである留学生が多言語多文化について具体的で肯定的な気付きが得られることを念頭に授業を行った。本稿では、授業の詳細を報告

し、授業中に学生が意見交換を行った Google Slide と授業後アンケートを通して留学生教育におけるバイリンガリズム授業の意義について述べたい。

2．バイリンガルについて

バイリンガルの定義について、Bloomfield（1933）は native-like control of two languages（二つの言語を母語話者のようにコントロールすること）と定義していたが、それと似た認識は未だ根強く残っているようである。[2]山本（1998）の調査によると、バイリンガルの定義は比較的狭義に捉えられており、両言語について少なくとも話したり聞いたりが流暢にできる者であり、4 技能すべてにおいて高い言語能力を持つ者であれば更によいと考えられている。しかし Grosjean（2012）は、言語能力中心の定義から離れ、「二つ（またはそれ以上）の言語を日常的に使っている人」と、バイリンガルを広義に捉えている。本授業では Grosjean の定義を大きい柱とし授業を行った。さらに、音声言語だけではなく、手話もコミュニケーションの手段として捉え、日常的に手話と音声言語に接している CODA（Children of Deaf Adult、耳が聞こえない大人の子ども）や、一つの言語を使用しているものの二つの文化背景を持つバイカルチュラル（Bicultural）をも授業の対象にし、多言語多文化現象について幅広く話し合った。

3．授業の概要

2021年度春学期は2020年に続き、新型コロナウィルス感染症拡大の影響を受け、名古屋大学国際言語センターで行われるすべての授業はオンラインで実施された。AJ コースの授業も例外ではなくオンラインで実施されたが、日本から、または日本に入国できなかった学生は自国から参加していた。授業は Zoom ミーティングを使い双方向参加型で行い、Google classroom と Google slide を活用し、課題の出題、資料の配布、意見交換などのインターアクションを行った。なお、講義用の資料はパワーポイントにまとめ授業中に掲示しながら講義を行い、授業後は学生に配布し授業内

容の振り返りに活用した。

3－1．授業の目標

名古屋大学国際言語センターにおけるAJコースの目標は、「上級レベルの体系的な日本語力の習得」、「日本、日本文化に対する的確な理解」、「各自の専門分野に通じる基礎的な知識と研究方法の習得」となっている。[3]本授業では上記の3つのコースの目標に加え、「世界の言語文化の多様性とバイリンガルについての基本的な知識を得る」、「日本におけるバイリンガル事情を理解する」、それから「学習者自身の言語背景と使用の多様性について理解を深める」ことを授業の目標に定めた。

また、AJコースの学生は今後日本語で研究を行っていく可能性があることから、研究方法の習得のため授業の内容と関連がある論文を与え読んでくることを課題とし、次の授業ではその内容について話し合った。さらに、研究指導を2回と研究発表を1回行った。

3－2．受講者

授業には8人の学生が参加した。学生の国籍は、インド、インドネシア、中国、ルーマニア、ベトナムで、それぞれの国から1名から3名の学生が参加していた。名古屋大学国際言語センターが定めている日本語・日本文化コースの参加資格は、日本語関連研究を主専攻とし、2年以上の日本語学習歴があり、日本語能力試験2級以上の日本語力を備えている必要がある。[4]しかし、授業に参加した学生はそれより高い日本語運用能力を有していたので、Google slideへの意見の書き込みや全体またはグループでの意見交換は円滑に行われ、その内容もかなりレベルの高いものであった。

3－3．授業の内容

授業は以下の内容で行われた。

	学習内容
1回目	オリエンテーション、導入
2回目	日本の言語事情・世界の言語事情、バイリンガルとは何か
3回目	バイリンガルの言語獲得と言語能力
4回目	バイリンガルの言語使用の特徴①：コードスイッチング（Code-Switching）
5回目	バイリンガルの言語使用の特徴②：正確さ、Semilingual？
6回目	多言語多文化社会を目指す
7回目	Emergent bilingual（緊急バイリンガル）と Translanguaging（トランスランゲジング）
8回目	バイリンガル教育について考える
9回目	研究指導①：グループ活動
10回目	異言語間家族のコミュニケーション：OPOL（One parent one language）
11回目	バイカルチュラル（Bicultural）
12回目	様々なバイリンガル：手話、CODA（Children of deaf adult）、方言
13回目	バイリンガル研究の多様性と方法 : 社会言語学的視点から
14回目	研究指導②：発表内容の確認、教師への質疑応答
15回目	研究発表、授業の振り返り

4－4．授業の方法

各授業では一つの授業テーマに対し、授業前活動、本授業、授業後活動の異なる活動を通して学んだ。授業では、授業の内容について自分の意見を話し、他の人の意見を理解するという意見交換を主な活動とした。詳細は以下のようである。

1）授業前活動

授業前活動は、本授業に入る前に授業のテーマについて考えたり調べたりする機会を与えるために行った。本授業への導入という位置づけで、前回の授業で次回の授業内容を簡単に紹介し、授業テーマについての自分の意見や調べてきたものを Google slide に記入することを課題とした。例えば、第 8 回目授業の「バイリンガル教育について考える」の場合は、「家

庭におけるバイリンガル教育の方法」について自分の意見を書くようにした。

2）授業

①　授業前活動の確認

授業前活動の確認と授業への導入として、学生が記入してきたGoogle slideを全体的に共有しながら、授業内容と特に関連がある意見を紹介した。場合によってはZoomのブレークアウトルーム[5]機能を使い、授業前活動で書いてきた内容についてグループで話し合うこともあった。

②　講義

パワーポイントに講義内容を作成したものを画面共有で提示しながら授業を行った。授業内容によっては関連映像を見せることもあった。例えば、第2回目の授業の日本の言語事情ではアイヌの言語と文化を紹介したが、アイヌの生活と文化を紹介した映像を見せ、学生の理解を助けた。

③　意見交換

毎回の授業では学生同士の、または教師と学生間の意見交換は主な教室活動であった。意見交換は教師が提示した問題について2―4人のグループに分かれ話し合ったのち、メインセクションに戻りグループで話し合った内容を紹介する方法で行った。話し合いのトピックの難易度や重要度によってはクラス全体で話し合うこともあった。

④　授業後活動の予告

授業の後は授業と関連したトピックについての意見をGoogle slideに書き、または論文を読む活動を行い、授業内容の理解を深める機会を与えた。また、授業前活動として書き込んだ他の人の意見にコメントや質問をすることもあった。学生が書いた意見や読んだ論文は次回の授業中にフィードバックした。

図１　Google Slide を使用した授業後活動「バイリンガルについての意見」

５．学生の意見交換

前述したように、これまでバイリンガルについての考えは、Bloomfield（1933）の「二つの言語を母語話者のようにコントロールできる人」から Grosjean（2012）の「二つ（またはそれ以上）の言語を日常的に使っている人」と大きく変わってきており、実際にバイリンガル児を抱える多くの親や教師は様々な教育を行っている。Bloomfield の定義に従い二つの言語において母語話者の言語能力を目指し教育を行っている人もいれば、Grosjean の定義に従い言語使用の側面に注目している人もいる。バイリンガリズムを理解するうえで他の人の意見を参考にしながら自分の考え方を定めることは極めて重要であると思われる。そのため、毎回の授業では全体的、またはグループでの意見交換を積極的に行った。さらに、学生の意見を可視化するため、意見交換の前は Google slide に自分の意見を記入してもらった。受講者は上級学習者ではあったが、専門的な見解を述べ他の人の意見を理解することにまだ慣れていないと考え、意見交換の前に自分の意見をスライドに記入し、意見を整理できるようにした。そうすることにより、他の

人の意見を聞く際も自分の意見と照らし合わせることができ、理解がしやすいのではないかと考えた。以下に学生が意見交換のため Google slide に記入した内容を紹介する。

5．1　授業後活動における意見交換

バイリンガルについての授業の後、受講者に授業内容を踏まえ、意見を書いてもらった。以下の表１で受講者の意見を紹介するが、内容の理解に妨げにならなければできる限り原文そのまま載せている。

表１　授業後活動の例【バイリンガルについての意見】

１）該当授業	第２回バイリンガルとは何か
２）質問	バイリンガルについてどう思いますか。いいところや悪いところがあれば書いてください。
３）活動の種類	授業後活動
４）活動の概要	第２回目の授業で、バイリンガルの定義の歴史や現在の考え方について説明した。授業の内容を踏まえ第３回目の授業の前に「バイリンガルについての意見」を Google slide に記入してもらい、授業中に意見交換を行った。ブレークアウトルームに2-4 人のグループに分かれ5-7分ぐらい話し合ったのち、話した内容を全体で共有した。
５）学生の意見	
①バイリンガルについて ・流暢さ、つまり言語能力に関係なく、ただ２つの言語が理解できれば、バイリンガルと言えるのではないか。一つの言語が流暢に話せていたら、もう一つはパッシブ（受動的）でもバイリンガルだと言えるだろう。 ・バイリンガルは目的によって（言語を）使い分けます。自分も目的や相手などによって話す言語が違います。友達と家族はインドネシア語で、日本にいる友達には日本語か英語を使います。 ・「バイリンガルというのは単に２人のモノリンガルが１人になったのではない」ということについてもう少し考えてみた。２つの言語能力が単独で自立するのではなく、逆に影響し合ったりすることによってモノリンガルとの違う、特殊的な言語能力になるということだと思う。 ・バイリンガルというのが２つあるいは２つ以上の言語を日常的に使っている人のことだが、その言語や言語の背景となる文化などを理解することができる人のことだと考えている。	

②バイリンガルのいいところ
・相手と話すとき、相手の心に触れられる。例えば謝るときや、感謝を表すとき、など。
・効率的に話せる。私の場合は時々インドネシア語で表せない言葉がある。その時は英語、またはジャワ語で表す。もちろん相手や場面によって違う。
・海外の人と友達になれ、仕事のためにもいい。母語で言いにくいことが言いやすい。
・二つの世界を知ることができ、精神的に豊かな人生を送れる。
・二つの言語や文化を知ることができる。
・言語知識、異文化意識が高い。
・二つの言語を使ってコミュニケーションをとったり、資料を読んだりするとしたら色々対照することができることから、それぞれの相違点類似点に気づくことが出来る。脳の働きも活発になる。

③バイリンガルのよくないところ
・時々言葉を混ぜたりしてしまう。
・母語の言葉を忘れる可能性があるかもしれない。
・言葉が出るのが遅い時がある。
・二つの文化が区別出来なくなって迷ってしまう。
・コードスイッチングまたはコードミキシングが癖になったら、一つの言語しか喋らない人と話す時は表現しにくい場合が多くなる傾向がある。
・自分がどっちの文化に属するか、つまりアイデンティティがはっきりしなくなるのではないか。

授業後活動であったので、学生の意見には授業内容が多く反映されている。この授業ではバイリンガルの定義について「二つの言語において母語話者のような言語能力を持っている人ではなく、日常的に二つの言語を使用する人」と紹介したが、学生の意見にそのような内容が多く見受けられた。授業後活動を通して、学習者が授業の内容をどのぐらい理解し、どのように受け入れているかを確認することができた。

5．2　授業前活動の意見交換

バイリンガル教育についてのテーマに入る前に、導入として「バイリンガル教育についての意見」を Google slide に書いてきてもらった。

表２　授業前活動の例【バイリンガル教育についての意見】

１）該当授業	第８回バイリンガル教育について考える
２）質問	自分がバイリンガル児を育てる親なら、何を重視して、何に気をつけて教育を行うと思いますか。
３）活動の種類	授業前活動
４）活動の概要	第８回目の授業の前に Google slide に記入してもらい、授業中全体的に意見交換を行った。
５）学生の意見	
・親の言語が別々の場合は言語に混乱しないように注意する。 ・言語使用頻度のバランスが取れるように両方の言語を使う映画やカートゥーンなどを見せる必要があると思う。 ・言語の間違いがあれば、優しく説明する。何回も同じことを間違っていても、いつも優しく説明するのはポイント。そうすると、その言語にいい印象を持ち、子供にとって、その言語を使うのが負担にならない。 ・学校は日本語ばっかりの場合は、家では英語の量を増やす必要があると思う。 ・両方の言語の読み聞かせをする。 ・自分の子供の言語獲得の進捗状況をほかのモノリンガルの子供とむやみに比べないこと。 ・子供が自分の言語能力を疑ったりするときに、子供を励まして自信を付けさせること。 ・子供に自分のアイデンティティを意識させること。 ・環境が変わるとしんどいこともあるため、子供の心のケアをする。 ・言葉の文化も教える必要がある。それは少し抽象的なことに触れてしまうが、もし、ある言葉の文化を子どもに親しませ、あるいは、色々な行事とイベントを通して、子どもにも実感が湧かせると、覚えも深くなる。 ・多数の言語を話す喜びがあるということを感じさせること。 ・文字が異なる場合、学校で使わない言語の文字を家で接触の機会を設ける。	

授業前活動であったが、ほとんどの受講者が多言語環境で成長したバイリンガルであるためか、かなり詳しく意見を書いていた。受講者の意見はバイリンガルの「二言語教育」のみならず、「文化」や「子どもの心のケア」にまで言及されており、授業内容の一部と密接に関係していた。授業では受講者の書き込みを授業の導入として活用するため、Google slide を全体的に画面共有しながら内容を確認した。

６．学生の授業評価

第15回目の授業時間に名古屋大学国際言語センターの全コース同一の

「日本語コース・クラス授業評価アンケート」(2021年度春学期)」を実施した。この授業は今学期初めての開講であるため、学習者の評価に非常に興味があった。授業内容への自由記述の回答のみ以下に紹介する。なお、アンケートには８人全員回答した。

表３　授業アンケート Q12

Q12. この授業の中で、これからも続けていったら良いと思う所はどこですか。また、良くしたほうが良い所はどこですか。
・先生が提供してくださったバイリンガルについての研究論文はとても面白くて役に立ったと思います。 ・社会言語学について色々紹介していただいたところです。 ・バイリンガルやセミリンガル等のテーマはとても新鮮で勉強になりました ・バイリンガル、セミリンガル、コードスイッチングに関する授業の内容は非常に役に立つと思うので、続けたほうがいいと思います。また、ある話題に対して意見交換をしたり、自分の感想や経験を言ったりすることも極めて重要だと思います。 ・具体的な言語の問題や状況について話し合うのも非常に面白く、役に立つと思います。 ・授業の前に日本と日本語のさまざまなアスペクトについてディスカッションして授業で詳しく勉強すること。 ・グループでのディスカッションが役に立ったと思います。 ・教材や授業の実施方法は全部続けて欲しいです。

毎回の授業ではその日のテーマについて以前から知っているかどうかを聞いていた。「バイリンガル」はほとんどの学生が聞いたことがあると答えていたが、それ以外の用語は初めて聞くと言っていた。それにもかかわらず、授業中の様子はとても楽しそうにディスカッションに臨んでいたし、質問も活発に出ていた。また授業後活動を通して、授業のテーマをよく理解していることが確認できた。

授業で見せる学習者の積極的な授業態度やアウトプットからある程度の満足度は予想していたが、アンケートでは予想を遥かに上回る肯定的な意見が得られた。受講者は授業で扱ったバイリンガルに関わる様々なテーマと内容と授業後活動として提供したバイリンガルについての資料などについて肯定的な意見を述べていた。さらに、授業中に積極的に取り入れたグ

ループ内の意見交換が役に立ったという意見が複数人からあった。

表４　授業アンケート Q13

Q13.　なんでも自由に書いてください。
（授業について具体的に述べた感想だけ示す。） ・バイリンガル教育はこれから私たちの人生においても大きな課題になるかもしれません。この授業で勉強したことは大変有意義だと思います。 ・授業が面白かったです。テーマやトピックも新しいなのでとても勉強になりました。 ・特に CODA について今まで聞いたことがなくて、今考えて見るとそういうことがあるのは珍しいなと思いました。 ・個人的にバイリンガルやセミリンガルなどのような多様性に興味深いので、授業は非常に楽しかったです。 ・言語を習いたいと思ってならい始めたけれど、今からは言語を言語のターミノロジの観点からみるようになると思います。様々な新しくて面白いことを教えてくださってありがとうございます。 ・バイカルチュラルに関していろいろ考えて、面白かったです。「普通ではない」環境で言語を取得する人たちについての授業も興味深かったです。

表４のアンケートの回答から、受講者は授業を通して多言語多文化について具体的で肯定的な気づきが得られたことがわかる。さらに、授業の内容について「興味深かった」、「勉強になった」、「有意義であった」など、肯定的な感想があった。

これらのアンケート結果から、様々なバイリンガルについての考え方を理解し、さらに世界で行われている言語現象と文化の多様性を理解するという本授業の目標がある程度は達成されていると考える。

７．まとめと今後の課題

本稿では留学生を対象に実施したバイリンガリズム授業の「言語文化の多様性入門」について、授業で行った活動と学生の授業評価を中心に報告した。授業目標である「世界の言語文化の多様性とバイリンガルについての基本的な知識を得る」、「日本におけるバイリンガル事情を理解する」、それから「学習者自身の言語背景と使用の多様性について理解を深める」に向けて、授業前活動、授業、授業後活動を通して学生の理解と授業内

容の定着を図った。学生の意見交換は授業の主な活動であったが、Google slide を活用した話す活動の可視化を通してお互いの意見をよりわかりやすくした。さらに、教師はすべてのグループ活動に参加できないので、意見交換の前に行った書き込みは学生が授業の内容をどのぐらい理解しているか、またはどのような意見を持っているかを確認することができ、授業内容の構成に参考にすることができた。「言語文化の多様性入門」は2021年度春学期に初めて実施された授業であることから受講者の授業評価に関心を持ったが、学生の授業アンケートには非常に肯定的な評価が寄せられており、バイリンガリズムに対する留学生の関心の高さを確認することができた。

日本語教育は「外国人に日本語を教える」という従来の在り方から、私たちが生きる社会のあり方や日々の出来事（石井2009）にまで枠を広げなければいけないと考える。さらに、外国人の増加で多言語多文化社会へと進んでいく日本社会の動きを理解し、様々な言語と文化を背景にしている外国人を社会の一員として受け入れるため、日本語教育におけるバイリンガリズムの理解は不可欠である。一人の受講者が授業評価のコメントとして「バイリンガル教育はこれから私たちの人生においても大きな課題になるかもしれません」と書いたが、バイリンガリズムは私たちの生活に大きく関わっており、これからもそうであると思われる。留学生を対象にするバイリンガリズム授業を通して、留学生自身が背景としている、もしくは積極的に関わっている言語と文化を理解し、さらには日本社会が目指している多言語多文化共生を共有することができるのではないかと考える。

今回の８人の受講者は全員名古屋大学国際言語センターが受講資格として定める日本語能力２級を上回る日本語能力を備えていたため、滞りなく授業を進めることができた。受講者間で日本語力の差がある場合の授業活動や授業の進め方については今後の課題にしたい。

注

１．2020年末の在留外国人数は288万7,116人で，前年末に比べ４万6,021人（1.6％）

減少している。前年末に比べて減少したのは、平成24年以来８年振りであるが、その原因の一つに新型コロナウィルスの流行で海外からの往来が不自由になったことが挙げられる。

（出入国在留管理庁：https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00014.html）

２．インターネットでバイリンガルを検索すると以下のような定義がなされている。

・２つの言語で話せる能力を持つ人を意味する語。（Weblio 辞書）

・２か国語を母語として話すこと。また、その人。（デジタル大辞泉）

・状況に応じて二つの言語を自由に使う能力があること。また、その人。（大辞林 第三版）

・二つの言語を使用する能力をもっている人のこと。この能力に関しては明確な基準はないが、一般にはどのような場面、用途においてもかなり自由にコミュニケーションができるレベル以上のものをいう。（日本大百科全書）

・二か国語を、場面・状況に応じて自由に使いこなせること。また、その人。（日本国語大辞典）

いずれの定義も優れた言語能力をバイリンガルの条件として挙げている。

３．名古屋大学国際言語センター日本語・日本文化教育部門ホームページ：日本語・日本文化研修コース「目標」参照 http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/japanese/ipaj.html

４．３番の「受講資格」参照

５．Zoom ミーティングにおいて、参加者を少人数のグループに分けてミーティングを行う機能である。

参考文献

石井恵理子（2009）「日本語教育と社会」野山広・石井恵理子編『日本語教育の過去・現在・未来 第１巻「社会」』第１部、凡人社、pp. 1-14

庵功雄（2009）「地域日本語教育と日本語教育文法：「やさしい日本語」という観点から」『人文・自然研究』３，126-141.

呉 禧受（2022）『あなたの知らないバイリンガルの世界』日本語教師読本11、webjapanese

春原憲一郎（2006）「専門日本語教育の可能性―多文化社会における専門日本語の役割―」『専門日本語教育研究』８，13-18.

福永由佳（2017）「日本語教育における複数言語使用の研究の意義と展望」『早稲田日本語教育学』22，61-80.

山本雅代（1998）「バイリンガルに対する意識調査：その結果が意味するところ」『社会言語科学』1（1），11-18，社会言語科学会.

Bloomfield, L. (1933) *Language*, New York: Holt, Rinehart & Winston.

Grosjean, F. (2012) *Bilingual: Life and Reality*, Harvard University Press.